

Sir Philip Sidney : *Astrophel and Stella* 試論

加藤 芳子

I

Johon Donne¹ が愛とか死とか霊魂、神、救いの世界などに関する思索をテーマとした抒情詩を、英文学史上初めて本格的に書いた人である事は、よく知られている事である。

しかし、ダンの詩に見られるような、次のような特性、即ち、

「知性の枠の中にははめこまれた強烈な情緒、異質的なものの結合による奇抜な比喻、劇的な独白形式と口語体の使用、緊密な論理的構成による説得、変化に富んだ短詩形の使用、凝集的な強靱な style にもられた問題意識」²

などの特性は、この時代をおおっていた一つの零囲気のようなものであって、ダン以前の詩人にさえ、これと同じような傾向が窺えるのだという事もまた、既に知られている事である。

例えば Shakespeare の劇にも形而上詩的な傾向が見られるし、1976 年の日本英文学会第 48 回大会（於 広島大学）で発表したように、Michael Drayton の sonnet sequences³ も、時をへて次第に形而上詩的な要素を濃くしていつている訳である⁴。

ただ、ダンがかの恋愛詩を書くに際して、wit や irony や paradox や pun や詭弁などに満ちた、論理的な展開法や、口語体による表現法や、conceitsなどを、Sidney の *Astrophel and Stella*⁵ からヒントを得ているのではないか、というような事は、余り指摘されてはいないのではないかと思われる訳で、本論に「試論」と断わっているのは、この、「的はずれ」かもしれないが、可能性がありそうと思われる無鉄砲な試みを、カモフラージュするためである。

II

さて、Sir Philip Sidney は 1554 年に生れ、Oxford や Cambridge 両大学の在学中に欧州を旅行し、卒業後、政治にたずさわり、最後は Zutphen の戦いで 1586 年に戦死している訳であるが、いま問題となっている、この『アストロフェルとステラ』⁶が出版されたのは、没後の 1591 年の事で、これが書き初められたのは 1581 年頃、完成したのは翌 1582 年頃と推定されている。

この詩が書かれたきっかけは、作者のシドニーが 1576 年に初めて会った、当時 13 才の少女、即ち、1 st. Earl of Essex, Walter Devereux の娘、Penelope Devereux が、1581 年に Lord Rich と結婚して、Lady Rich となった事らしく、従ってこの詩『アストロフェルとステラ』は、このペネロピーなる女性（即ちステラ）に対する、恋人シドニー（即ちアストロフェル）の、悲恋の物語であると解釈されてきている。しかもこの詩は、シドニーの生前中には出版されることなく、ただ限られた人達の間だけで回し読みされたものにすぎず、シドニー自身も、この詩を公けにする意図はなかったものと考えられている。

III

この詩集は、108 のソネットと、11 のソングとでできており、その構造は、まず、この詩集の意図や、作者の詩作上の基本的な姿勢に関する、シドニーのことわりがきがあり、次に、ステラに対する賞讃と愛の言葉、ステラの徳とか体面による拒否と、それによるアストロフェルの苦悩、アストロフェルの押えきれない情欲とステラへの誘惑、それに対するステラの拒否とアストロフェルへの軽蔑、などが互いに交錯し、最後に、二人の別離と、それによって起こる悲痛を詠うところで、終わっている。

さて、この詩を読み進むと、前半は、美しいステラ的美貌と美德とを賞讃して、彼女を女神として崇め、アストロフェルの心の中に神殿を建てて、この女神をたてまつるといふ、いわゆる Petrarchan tradition を想起させるのに反して、中頃から

は、アストロフェルの情欲がテーマとなるにつれて、彼の燃え上る情欲と、それを拒み美德を説くステラ、その拒否に供うアストロフェルの苦悩、などが交錯して詠われ、アストロフェルの感情が高まるにつれて、詩そのものが起伏に富むものとなって行き、ダンの恋愛詩に見られるような、形而上詩的な表現が目につくようになる。

例えば、前半の、いわゆる Petrarchan tradition を想起させる image としては、ステラなる女性の顔は、美しく輝くので宮殿⁷や星⁸にたとえられており、その眼は、黒玉⁹や星¹⁰にたとえられ、ステラ的美貌は、キーピッドの武器¹¹とか軍隊¹²にたとえられ、アストロフェルの心は、奴隷¹³とか捕虜¹⁴にたとえられたり、ステラなる徳の女神をまつる神殿¹⁵にたとえられている。

IV

このように、単にステラ的美を賞讃しているうちは、Petrarchan tradition を殆ど踏襲しているように見える、この詩集の前半とは異なり、中頃から、アストロフェルの情欲が押えきれない程のものとなり、ステラ的美徳によって愛を拒まれると、一層その欲望が燃え上って、葛藤に悩むようになるにつれて、この詩集は、pun とか詭弁、paradox、どんでん返し、形而上詩的な conceit などを、多用するようになっていく。しかも、その conceit は、中でも特に、かの形而上詩人ジョン・ダンの恋愛詩のそれと、類似しているものがあるのである。

例えば、『アストロフェルとステラ』の中の次のような一節を読んだならば、これが、シドニーのではなくて、ダンの詩ではないかと思うのではないだろうか。

62

Late tyr'd with wo, even ready for to pine
With rage of *Love*, I cald my Love unkind;
She in whose eyes *Love*, though unfelt, doth shine,
Sweet said that I true love in her should find.

I joyed, but straight thus wated was my wine,
That love she did, but loved a Love not blind,
Which would not let me, whom she loved, decline
From nobler course, fit for my birth and mind:

And therefore by her Love's authority,
Willd me these tempests of vaine love to flie,
And anchor fast my selfe on *Vertue's* shore.

Alas, if this the only mettall be
Of *Love*, new-coind to helpe my beggery,
Deare, love me not, that you my love me more.

Eighth song

Wept they had, alas the while,
But now teares themselves did smile,
While their eyes by love directed,
Enterchangeably reflected.

(11. 13–16)

104

But if I by a happy window passe,
If I but stars upon mine armour beare,
Sicke, thirsty, glad (though but of empty glasse:)

(11. 9–11)

105

Unhappie sight, and hath she vanisht by
So neere, in so good time, so free a place?
Dead glasse, doost thou thy object so imbrace,
As what my hart still sees thou canst not spie?

(11. 1–4)

これら4つの引用に共通するのは、ダンの“Valediction : of Weeping”の中の「涙の image」である。ソネット 62 番に於て、アストロフェルの苦痛に満ちた心は、その食物であるステラを乞い求めながらも得る事ができないでいるので、「乞食の身」にたとえられ、ステラの眼が放つ platonic love の眼差しは、乞食の身であるアストロフェルを慰めるために、新しく鑄造された「愛の貨幣」としてたとえられている。第8ソングに於ける、「二人の眼は愛に指示されて、互いに映って交し合った」(15-16行)という一節には、eye-baby という conceit がある。ソネット 104 番と 105 番に於ける、「からっぽのガラス」(11行)とか、「死んだガラス」(3行)という image は、ステラの姿が映らない窓ガラスとか、ステラの姿が映らないアストロフェルの眼を指している。ソネット 62 番と第8ソングは、アストロフェルの欲情とステラのおとなしさを詠ったものであり、また、ソネット 104 番と 105 番は、「別離、あるいは、不在の詩」であるが、眼から生れる「貨幣鑄造」の conceit とか、眼や窓ガラスに姿が映るという状況と、「別離、不在」というテーマとは、ダンの“Valediction : of Weeping”の第1連(1-4行)を想起させずにはおかない。

A Valediction: of Weeping

Let me powre forth
My teares before thy face, whil'st I stay here,
For thy face coines them, and thy stampe they beare,
And by this Mintage they are something worth,

(11. 1-4)

これも、やはり「別離」の詩であり、しかもこの中では、女の顔が「造幣局」にたとえられ、男がそれを見て流す涙が「貨幣(硬貨)」に、そして、その男の涙に映る女の姿が、硬貨の上のいわゆる「刻印」に、それぞれたとえられていて、先のシドニーの詩と並べてみると、テーマといい、状況といい、conceit といい、酷似していると言わざるを得ない。ただ、ダンは、一つの詩の中に、これらの conceits を有機的に凝集させて、dramatic に展開しているのである。

同様に、シドニーとダンの両方の詩に共通して、「原型」とその「模型」という conceit が見られる。

91

Stella, while now by honour's cruell might,
I am from you, light of my life, mis-led,
And that faire you my Sunne, thus overspred
With absence' Vaile, I live in Sorowe's night.
If this darke place yet shew like candle light,
Some beautie's peece, as amber colourd hed,
Milke hands, rose cheeks, or lips more sweet, more red,
Or seeing jets, blacke, but in blacknesse bright.
They please I do confesse, they please mine eyes,
But why? because of you they models be,
Models such be wood-globes of glistening skies.
Deere, therefore be not jealous over me,
If you heare that seeme my hart to move,
Not them, ô no, but you in them I love.

このソネット 91 番に於て、ステラの美は「天そのもの」、即ち、天という原型であり、アストロフェルの心に浮ぶステラの美の細部（例えば、金髪とか白い手など）は、「天」であるステラの「木球模型」にたとえられている。

そして、これと同様の conceit が、Bedford 伯夫人宛に出したダンの手紙の中の、
貴女は善と美の原型で模写である¹⁶
という賞讃の言葉とか、更には、ダンの“Anatomy of the World”の中の、Elizabeth Drury に対する、

あらゆる美しいすがたの原型¹⁷
という賛辞などにも、見られるのである。

更に、“hemisphere”「半球」という conceit も、シドニーとダンの詩の両方に、同じような状況の下で、見うけられるものの一つである。

89

Now that of absence the most irksome night,
 With darkest shade doth overcome my day;
 Since *Stella*'s eyes, wont to give me my day,
Leaving my Hemisphere, leave me in night,
Each day seemes long, and longs for long-staid night,
 The night as tedious, woos th' approach of day;
 Tired with the dusty toiles of busie day,
Languisht with horrors of the silent nighth,
Suffering the evils both of the day and night,
 While no night is more darke then is my day,
Nor no day hath lesse quiet then my night:
 With such bad mixtrue of my night and day,
That living thus in blackest winter night,
 I feele the flames of hottest sommer day.

Tenth song

Thinke, thinke of those dalyings,
 When with Dovelike murmurings,
 With glad moning passed anguish,
 We change eyes, and hart for hart,
 Each to other do imparte,
 Joying till joy make us languish.

(11. 37–42)

ソネット 89 番に於て、ステラは、アストロフェルにとっては、昼の半球であり、逆に、ステラのいない時は、夜の半球なのであり、丁度、昼と夜が互いを求め合う

ように、アストロフェルも、ステラのいない悲しみと、ステラへの情欲とに責めさいなまれているという、「半球」の conceit や、第10ソングの中の（40-42行）。

二人が目と目を交し、心と心を
互いに相手に分かち合って、
喜びにやつれるまで喜ぶ時の。

という表現の中の、二つの半球とも言える、心臓の conceit は、ダンの“The Good-morrow”という詩の中の、男と女がそれぞれの半球を求めて一つになろうとするところを思い起こさせる。

The Good-morrow

Let sea-discoverers to new worlds have gone,
Let Maps to others, worlds on worlds have showne,
Let us possesse our world, each hath one, and is one.

My face in thine eye, thine in mine appeares,
And true plaine hearts doe in the faces rest,
Where can we finde two better hemispheares
Without sharpe North, without declining West?
What ever dyes, was not mixt equally;
If our two loves be one, or, thou and I
Love so alike, that none doe slacken, none can die.

(11. 12-21)

次に、「のりうつり」の conceit とでも呼ぶべきものがある。

I do not envie *Aristotle's* wit,
Nor do aspire to *Caesar's* bleeding fame,

Nor ought do care, though some above me sit,
Nor hope, nor wishe another course to frame,
But that which once may win thy cruell hart:
Thou art my Wit, and thou my Vertue art.

(11. 9–14)

ソネット 64 番に於て、アストロフェルは、ステラをものにする事ができれば、ステラの才知と徳を自らに備える事になるとして、自分の欲望がかなう事を願うのであるが、このような一心同体というか、「のりうつり」という conceit は、ダンの“The Flea”という詩に於て、もっと詭弁を弄して展開され、女を誘惑するのに説得力のある口説き文句となっている。

The Flea

Marke but this flea, and marke in this,
How little that which thou deny' st me is;
Mee it suck' d first, and now sucks thee,
And in this flea, our two bloods mingled bee;

(11. 1–4)

Oh stay, three lives in one flea spare,
Where wee almost, nay more then maryed are:

This flea is you and I, and this
Our mariage bed, and mariage temple is;

(11. 10–13)

V

さて、ダンの恋愛詩がシドニーの詩からヒントを得て書かれているように思わせるのは、このような conceit の点だけではなくて、どんでん返しの構造とか、

paradox の多用とか、word-play などの手法の点からも、そう思わせるのである。

Fift song

You then ungratefull thiefe, you murdring Tyran you,
You Rebell run away, to Lord and Lady untrue,
You witch, you Divill, (alas) you still of me beloved,
You see what I can say; mend yet your froward mind,
And such skill in my Muse you reconcil'd shall find,
That all these cruell words your praises shall be proved.

(11. 85-90)

第5ソングに於て、アストロフェルは、ステラに愛を拒まれた腹いせに、ありったけの呪いの言葉をステラに浴びせかけた末に、ステラがもしその強情な心を変えてくれたならば、今のべたこの呪いの言葉を全て、ステラに対する賛辞に変えてみせよう、と述べて、それほど憎んでいたステラをなおも愛さずにはいられないアストロフェルの複雑な心境を、どんでん返しで暴露している。

また、word-play に関しては、ソネット 24, 35, 37 番などで、“rich”という形容辞を、Lord Rich, 即ち、ペネロピーの夫にかけて皮肉を言ったり、ソネット 63 番のように、ステラの“no, no”という強い拒否の言葉が、文法上は、二重否定は肯定を意味するので、アストロフェルの愛を受け入れるという、いわば“yes”の意味になるなどという詭弁を弄してまで、情欲を満たそうとするアストロフェルの姿勢などに、見られる。

Paradoxical な表現は、アストロフェルの悩める心と情欲との板ばさみの状態などを表現するのに、沢山使われている。

例えば、ソネット 57 番では、アストロフェルが自分の恋の苦しさを記した詩を、美しい恋人ステラが歌ってくれるので、苦しみの詩が逆に甘美な歌と化して、その甘美さが、アストロフェルの苦しみを喜ばせたり慰めたりすることになり、同じテーマの 58 番でも、アストロフェルが切々と自分の悲しみを記したのに、その詩を歌ったステラは、その美しい顔と声で、逆にアストロフェルに喜びを与える事になって

いる。

また、ソネット 60 番には、

私には居る事が居ない事、居ない事が居る事。

呪われのうちに至福、至福のうちに呪われている

とか、そして、第1ソングには、ステラに対する賛辞として、「叱るが、いつくしむことになる優美」(18行)とか、「打つことなくして屈服させる手」(21行)とか、ステラのところだけ「すべてのそねみは絶望して悔いる」(24行)とか、「最も解けた時、最もかたく結ぶ髪」(25行)とか、「死ぬ時に喜び生きさせる」(26行)とか、ステラについてだけは「おべっか使いもうそをつかない」(28行)などという paradox が見られるし、また、ソネット 79 番の、接吻に関する、「取りもし、与えもする手段を教える、歓喜の学校教師」(9行)とか、「傷つけもし、治しもする仲よしの格闘」(10行)とか、「相手の中に生きるすてきな死」(11行)という paradox など、他にも沢山見られる。

VI

以上のような、詭弁とか、どんでん返しとか、word-play とか、paradox などの手法の使用によって、シドニーが作り上げた witty な世界を hint にして、ダンは、更に強靱で緊密な wit を駆使して、シドニーよりももっと dramatic な世界を構築したのだ、と考える事ができる根拠を次に述べていきたいと思う。

そもそも、当時の詩というものは、大体に於て、宮廷とかそれを取巻く貴族の邸宅のサロンという社交場に集まるわずかな知識人とか、Oxford や Cambridge などの主要な大学が中心となって活動していた文学上のサークル等の中で生れて、ここから広まっていったために、様々な詩人の詩の間にもかなりの類似点を認める事ができるのだという事は、よく言われてきている事である。

ここで、もう一度、シドニーとダンの生涯を並べて振り返ってみると、まず、シドニーが生れたのは 1554 年で、ダンは 1572 年頃とするのが定説となっている。そして、二人共、まず Oxford 大学に入学し、Cambridge 大学へ移り、ダンの場合には

更にその後、ロンドンの Lincoln's Inn に入っている。この同じ大学の伝統の中で、二人は、同じ伝統の学問に触れているはずであると、まず推察される。しかも、シドニーの『アストロフェルとステラ』は、1951年、即ち、ダンが Cambridge から Lincoln's Inn に移る前後の時期に出版されており、その前に 1586年に戦死している作者、シドニーの評判と名声は、その当時、ダンが Oxford の学生であった頃に、同じ Oxford 出身の先輩の評判として、必ず耳にしているはずである。しかも、ダンがロンドンの Lincoln's Inn に在学していた時期は、Mermaid Tavern で文人と交流したり、ロンドンの社交界に出入りしたりして、いわゆる放蕩の生活と学問研究の生活との交錯している時期に当たり、ダンの *Satires* や *Elegies, Songs and Sonnets* などの恋愛詩が生れたのは、この、1592年頃から 1598年頃の時期に当たっている事は、既によく知られている訳である。

更に、ダンは、1596年に、2nd. Earl of Essex, Robert Devereux に従って、Cadiz 遠征に、翌97年にも、Azores 群島遠征に加わっている訳であるが、この2代目エセックス伯と、それから、シドニーが『アストロフェルとステラ』の中で悲恋の思いを捧げている sonnet lady、即ち、Penelope Devereux(その父は、1st. Earl of Essex, Walter Devereux)とは、兄妹である事からみても、また、ダンは、Oxford 時代の友人の紹介で Essex 伯に気に入られるようになっている事からみても、この Oxford 時代の友人から、ダンが、シドニーについて耳にしている可能性は否めないと思われるのである。

VII

以上のような推測をまとめてみると、ダンは恐らく学生時代に、先輩であるシドニーの名声を耳にし、その作品『アストロフェルとステラ』を読んでおり¹⁸、その中の conceit や、様々な文学上の手法を hint にして、ダン自身の放蕩生活と合わせて生れてきたのが、彼の恋愛詩の世界なのではないだろうか、という結論に至る訳であるが、この辺の事情については、更に詳細に調べる作業が残されており、今後の研究の課題としたい。

この小論は、1978年9月30日に日本英文学会北海道支部第23回大会(於北海道武蔵女子短期大学)にて口頭発表したものに加筆を施したものである。

NOTES

1. 使用テキストは、H. Gardner (ed.): *The Elegies and The Songs and Sonnets of John Donne* (Oxford : Oxford University Press, 1965), Oxford English Text である。

2. 『英米文学史講座 4 —— 17世紀』(研究社, 昭和46年), p. 41.

3. M. Drayton 作の *Indeas Mirrour : Amours* 及び *Idea*。テキストは、*The Works of Michael Drayton*. Ed. by J. W. Hebel, K. Tillotson, and B. H. Newdigate, in 5 vols. (Oxford : Blackwell, 1961)。

4. この辺の事情については、拙論「Drayton, *Idea* —— その加筆修正をめぐって」東北学院大学大学院文学研究科論集『東北』第10号(昭和50年3月) pp. 1-13, 及び、「Drayton のソネットの変質」札幌大学教養部紀要第8号(1976年3月) pp. 105-120 を参照されたい。

5. 使用テキストは、W. A. Ringler(ed.): *The Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford : Oxford University Press, 1962), Oxford English Text である。

6. 訳本は、中田 修氏訳の『シドニー詩集 —— アストロフェルとステラ』(東京教学社, 1976) を参考にし、引用文にお借りしている。

7. *Astrophel and Stella*, Sonnet 9.

8. *Ibid.*, Sonnet 19.

9. *Ibid.*, Sonnet 9, 47.

10. *Ibid.*, Sonnet 26, 42, 43-48.

11. *Ibid.*, Sonnet 29.

12. *Ibid.*, Sonnet 36.

13. *Ibid.*, Sonnet 29.

14. *Ibid.*, Sonnet 36.

15. *Ibid.*, Sonnet 45, 47.

16. *Donne's Poetical Works*, ed. by Grierson, vol. 1, p. 193. 'To the Countess of Bedford,' l. 56.

17. Donne, 'An Anatomy of the World,' ll. 227-8. 原文は以下の通り。

She that was best, and first original

Of all fair copies....

18. もちろん、これは推測だけで済む問題ではありえず、確認をする必要がある。ただ、重要な手掛となるのは、ダンの詩の中に、シドニーと妹とによる聖書の Psalms (詩篇) の英訳の作品を、絶賛している詩 ('Upon the translation of the Psalmes by Sir Philip Sidney, and the Countesse of Pembroke his Sister') が存在している事である。(これは、*The Divine Poems* 中にある。) 即ち、この事から、ダンがシドニーの詩を少なくとも多少は読んでいた、という事実は、はっきりしている訳である。この事実は、学会での口頭発表後数日たってから、筆者が、大学院での指導教授であった村岡 勇 文学博士に、直接御指導を仰いだ結果御指摘いただいた、貴重な「証拠」であることを、ここにお断わりしておく。